



Title	当日質疑応答内容の紹介
Author(s)	小松原, 織香
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 107-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79257
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集4 第1回 臨床哲学フォーラム（ふるいにかけられる声を聴く）

テーマ：非人間・暴力・対話：関係性をめぐって

当日質疑応答内容の紹介

小松原 織香、参加者のみなさま

河原梓水（福岡女子大学）：前近代の社会における自然の位置づけを念頭において小松原さんのお話を聞いていました。自然とは三輪山や富士山のように神として祭られており災害時には暴力的に暴れ回る他者として位置づけられていると思います。自然を神と考えた場合、小松原さんがあげられていた杉本さんの語りは、イワシという神の使いから啓示を得たと理解でき、神からの救済、宗教による癒しと似通った行為と理解できるでしょうか。

小松原：これは面白い質問ですね。実は今、質問者がおっしゃったとおりです。もう少し概念的なレベルでお話すると、私の今日お話ししたことは、「非-人間」と「神」が代替可能な構造になっています。その上で、私がどう考えていくのかは悩むところです。実は、私はこのさき、イワシについて、アニミズムの観点から議論しなければならないと思っています。これはよく知られていることですが、杉本さんはある宗教団体の信者さんです。その宗教意識を持ちながら、イワシについてもお話しされているところがあります。それからもうひとつ、杉本さんが強調されるのは、やってきたのは自分たちが食べるイワシだということです。杉本さんは、この出来事の後に、海に向かって御神酒を捧げています。なぜ捧げたかと言うと、この時には漁の準備をしていなかったで、とったイワシを湯がいて配ってみんなで食べるということができなかったからです。イワシを無駄に死なせてしまったということへの悔いで、御神酒を捧げているんです。このとき、イワシは宗教的な象徴ではあるんですが、神々しいものというよりは、自分たちの食べるものとして捉えられています。自分たちがふだん、とって食べていたイワシがやってきた、だから自分は漁師だと認識する、そういう経験になっています。「宗教的」でありながら「日常の中にあるもの」というイワシの話はもう少し考えていきたいと思っています。

土山宙将（大阪大学3回生）：自然の声というものは、そもそも聴けないものだと思っていたので、代弁者をとおして聴くという考え方はすごく新鮮で印象的です。ただ、僕としては、たとえば哲学というものは今実際に何か問題が起きて、そこから研究して何か見えてきて、それを普遍化したりするなかで問題が起きる前に何か対処できるものにするようなものかと思っています。被害者に対処するなかで、最終的には被害者がいない、あるいは、いても

できるだけ軽度な状態ですませるために知識や知恵を積み上げていくものだと思っています。小松原さんの想定される状態では、自然が破壊されるような大きな問題が立ち上がっています。実際にここでされている対話実践が成熟して、このような大きな問題が生じない状態では代弁者がいなくなると、今度は声を発する者がいなくなると、すると、また大きな問題が起きるようになってしまうという可能性はないのかなと思いました。もしくはそういうときにも、その状況でも、ここで積み上げられてきている自然の声を聴く哲学が役に立つのかが気になりました。

小松原：ありがとうございます。とても大事な質問です。修復的正義の考え方を、私は時系列で三つに分けています。ひとつめが「防犯」で害を防ぐことです。ふたつめは「介入」で、今起きていることに対処することです。みつめが「アフター」で、すでに起きてしまったことに対して回復させたり償ったりすることです。いただいたご質問を私の言葉で言い換えると、修復的正義の「防犯」の機能が強くなれば「介入」も減っていくし、「アフター」の問題もなくなっていくということだと思います。私はどちらかというと「アフター」に重きを置くタイプなので、犯罪や災害が起きてしまった後のことを主に扱っています。その上で、「防犯」によって環境破壊が全て防止できるのかを考えてみると、私はそうは思いません。私は、「自然の声」を聴いたら人間が自然破壊をやめるかという、おそらく人間は「自然の声」をいくら聴いても、自然を破壊するだろうと想像しています。それでは、「修復的正義に意味はないのか」というと、そうではなくて「できれば自然破壊を防ぎたいんだけど、でもきつと破壊するんだろうな」というのが私の頭の中にあることです。こういう考え方がメジャーなのかはわからないのですが、北欧神話の中にはそのような発想があるというのは読んだことがあります。原始から人間という存在は、「自然は危険が多いものだ」と捉え、その危険を減らしていった安全で自分たちにとって暮らしやすい環境にしていきたいと考えています。でもそれは自然の状態をどんどん人工化していくことになりますし、その延長線上に自然破壊があります。自然破壊を続けると、そのしっぺ返しが来て、自分が快適にしたはずの自然から逆襲されて破壊されてしまいます。それが必ず起きるんだ、という発想が北欧神話の中にはあるそうです。この発想に拠れば、人間は「自分たちが自然のしっぺ返しを受けたくない」からという理由で、自然を守ろうとすればするほど、それは自分の安全を守ることを追求することになります。だから、「人間の生きている世界はどうやって最終的には破壊されるんだという」そういう神話の構造が北欧にあると知って、私に近い立場だと思いました。つまり、自然破壊防止に対して、「こうすれば上手くいく」という予測はないけれど、「何もしない」わけではない。ただ、自分の研究は「自然破壊を防ぐ」ということを目的にはしないです。なので、私は修復的正義を促進した結果、「アフター」の被害者が減っていくと展望は、あまり考えていないと思います。

高原耕平（人と防災未来センター）：感想みたいになってしまうんですけど、後半のお話をうかがっているとき、内容自体はセンシティブなわけではないのに、環状島の尾根の上でめちゃくちゃ風に吹かれて足下がどないになっているやろうみたいな感じで聞いているような印象をもちました。そこで驚いたのは、小松原先生の話は、出版されている『性暴力と修復的司法』のイメージが強かったのですが、シベリアの話や水俣の話が出てきて、個人的には新鮮というか、そこにつながりがあるんだというのがおもしろかったです。たまたま2年前に水俣に3日くらいしかいなかったんですけど行ったことがあって、そこでの風景を覚えていて、それを思い出していました。そのときすごくびっくりしたのが、海を見たときに、海の生態系が回復しているってことにすごく衝撃を受けっていうか、それになんか近づいていいんだろうかっていうガツンと殴られたような、でも別に実際は殴ってこないわけで。ここでは、加害されたのが人間である場合とは違うことが起こっていると思います。

小松原：今おっしゃられた水俣の海の話ですが、人間が作画的に回復させたというところもあります。1970年代から海底に蓄積された水銀ヘドロを埋立地に封じ込める工事を熊本県がやりました。話がそれてしまうんですけど、水俣病運動では、市民団体が熊本県を相手取って工事差し止めの裁判をやったんですよ。市民団体は、「熊本県は見せかけの工事をやろうとしていて、逆にヘドロを中途半端にかき回すだけで危ないんじゃないか」という疑問を提起して、工事の差し止め請求をしました。つまり、「ヘドロ除去の工事は本当に安全なのか」を問う論争を仕掛けていったんです。市民団体が科学論争をするというのは今でも大変なんですけれど、その先駆けになるような裁判を起こしたわけです。このときの裁判は、残念ながら市民団体側が負けてしまいました。でも、熊本県は裁判で負けると困るので、はじめの計画よりも厳密なヘドロ除去工事をやったようです。その結果として、かなり海がきれいになったという経緯があります。その辺にも水俣ではせめぎ合いがあったんです。

そういう人間的な話とは別に、今、高原さんがおっしゃったように、「人間だったらもうゆるさない、二度とこんなところに来たくない」というような状況になっていたのに、水俣の海では、魚たちが帰ってきて、水も本当にきれいです。穏やかな海で夕日が差したりすると絶景です。もともと、水俣の海岸線は丸く湾になっていて、対岸には島があり、内海になっているんですよ。波がほとんど来なくて、すごいフラットな海面なんです。だからこそ、水銀が排出されたときに、そこにたまってしまったんですけど、でもすごく穏やかな海なんです。この海のそばで生きてきた人たちが被害にあったということがとてもとても大事なんだと思います。海がある意味、人間の環境破壊の罪をゆるしているように見える中で、人間のことをどう考えるかということ、ある意味、海から迫られているといえるのではないかと思います。それと同時に、私はこういう話の中で、「魚も犠牲になった」とか、「魚と共に生きてきた」とか、そういう発想が好きなんですけれど、そうではない人も水俣地域にはいます。なかには、水俣病の被害について、「自分たちを魚といっしょにしてくれるな」と

いう患者さんたちもやっぱりいます。その背景には、差別の中で患者さんたちが人間として扱われてこなかったというすごく辛い気持ちがあって、「昔は虫けら扱いされたのに今度は魚か」という人もいます。「海がきれいだ」ということでさえ、なかなかひとつの話では落ち着かないところが、水俣にはあります。

高原：ありがとうございます。ひとつだけお聞きしていいですか。それにしても、何で水俣なんですか。ご講演のなかに、水俣に先輩がいたという話は出ましたが。

小松原：特に何も考えていなかったです。とりあえず水俣に行ってみたいと言うと、水俣にいる先輩から「どうぞいらっしゃい」と言っていた話でした。それでも、やっぱり何も知らずに行くわけにはいかないので、とりあえず図書館で本を読んで予習しました。それで実際に現地に行くと、先輩が、ある関係者の方のお家に連れて行ってくださいました。その方が、本質的な話以外聞いてくれない人だったので、私も取り乱しながら、当時やっていた性暴力の研究や博士論文の話をしました。そうすると、向こうの方も言葉にはせずとも「なんで、お前はそんなにエモーショナルなんだ」みたいにちょっとびっくりしちゃったみたいで、「鍋食べるか」と言ってもらい、私は初対面のその方の家で鍋をご馳走になり……このとき、私は「すごくダメなことをしている、水俣まで来て当事者に迷惑をかけている。このままではいかん」と思い、「また来ます」と言って帰りました。そして、その時にその方から聴いた話を無駄にしたくなくて、付け焼き刃な知識のまま、「水俣の祈りと赦し」という短い論文を書きました。そうすると、いろいろと批判も受けましたし、今度は別の方から「おまえは何もわかっていない」とか「もう少し腰を落ち着けてやりなさい」というお叱りもいただき、それで「これではいかん」と思って、また水俣に行き……それから、毎回、どこかで杉本水産の釜揚げシラスをご馳走になり……そんな調子でずるずると「水俣に恩がある」という感じで通っています。

ほんまなほ（大阪大学）：今日は、文章では伝わっていなかった、小松原さんの思想というものが直接伝わってきて、私はそういう人の語りが好きなので、人の語りがもつ力ってすごいなと思いながら聴いていました。そのうえで、「死者としての当事者」の話、あげられている例が環境破壊の例なので、当事者の問題っていうのは、環境破壊とか、震災とか、そういう被りを経た人たちの問題なのかな、それに限定されるのかな、それ以外のことは難しいかなって最初は思ったんです。でもなんかずっと、今までの質疑応答を聞いていて、だんだん考えが変わってきて、すごく大事なことを併記されているなと思いました。いかなる当事者も、たぶん代弁者なんです。これは問題の種類を問わず、たぶん、語ることは、必ず代弁することだって思ったんです。だから、そういう意味では、当事者が語るということは、死者として語っているんだなとひとつ思いました。かつ、当事者が死者として語るというこ

とと、当事者がそれを研究することってというのは、距離が必要だとすごく思いました。その二つのことをおっしゃられていたので言いたくなりました。その二つの距離、すごく大事だと思うんですよ。当事者が代弁している当のものについて近づきすぎてはならない、もうひとつは、死者として語る当事者が力もちすぎではダメで、それを研究にしてあるポジションを与えるとき、その距離感ってすごく大事だと思うんです。私がすごく最近モヤモヤしているのが、ちょっと前は当事者の声を聴くというのがブームで、今度は当事者が自分を語り研究するっていうのがすごくブームじゃないですか。それをするっていうことは、今言った二つの距離をくっつけてしまうことだと思っていて、ものすごく暴力的だと思うんですよ。今、私も授業で自分について語るということをやっていて苦闘しているんですけど、そこで自分が何をしているかという、私はメッセンジャーなんだと思うんです。当事者がどんなに雄弁に語っても声なきものっていうのは残り続けていて、それを私は誰かに語る義務があると思うんです。自分の体験であったとしても。そこに常に距離感があって、それはどうしても縮まらないんですよ。その距離感が大事だし、それをそのまま伝えたら研究になるかっていったら全然そんなんじゃないかって、だから、私は、今これはとりあえずは研究にしたいかって思っています。メッセンジャーとして語るということが、とりあえず今は自分にとってしっくりくるというのがあります。ですので、その二つの距離感について教えていただきたいです。

小松原：めちゃめちゃ本質的な質問が来てしまいましたね。うまく答えられるか自信はないですが……実は私は性暴力の被害経験があります。大学院の博士後期課程までは、クローズドでしたが、「当事者かつ研究者」でした。なので、私は当事者として研究するというのは、すごく大変だという実感もあるし、やりたくないという気持ちもあります。正直に言えば、私は水俣病の問題に向き合い始めて「水俣の人の気持ちはわからんわ」と思ったんです。それは、知識として理解できないという意味ではないです。私は性暴力に関してはすごく勘が働いて、エスパーみたいに相手の痛みが心に入ってきました。なので、研究しているときはいつも心が痛くて、痛くて地獄でした。それが、水俣にきたら全然痛なくて、「鈍感でアカン研究者やん」と思いました。でも、それが大事だとも思いました。わからんから問題に踏み込めるし、わからんから突っ込んで書けるし、というのがあります。そのとき、私は「ああ、なるほど、私が嫌ってきた鈍感で食欲で、どんどん論文を書ける研究者というのはこれか」と思いました。アンビバレンツなんだけど、これが研究者に必要な仕事だと、今、自分が感じているところもあります。

私が幸運だったのは、水俣は研究者慣れしているんで、こういう未熟な研究者が入っていても受け入れ先があったことです。それが水俣という場所の持つ土壌だったんです。水俣病は公式確認からも 60 年以経っていて、これまでも研究者やアーティスト、ジャーナリストがいっぱいきて、搾取しまくった土地です。その歴史の中に、蓄積されたもの、破壊されたもの、生み出されたものがあります。水俣に触れたあと、性暴力の運動について再び

考えてみると、「今の性暴力の運動は、1970年代の水俣病運動だ」と思ったんです。私は2000年代くらいから性暴力の問題に関わり始め、当事者としても対話やゆるしについて話していましたが、その言葉を出しただけで周囲がヒートアップするのを感じましたし、孤立感がありました。今の水俣では、賛否両論はありますが対話やゆるしの話があることは理解されています。しかし、1970年代の水俣病運動は「怨」の字を染め抜いた旗を持って、街を練り歩いて、チッソをゆるさないという運動をやっていたわけです。それから時間が経つうちに、対話やゆるしの話が運動の中でも出てくるようになります。それに気づいた時、「私はちょっと早かったな」と思いました。「今の性暴力の運動に必要なのは『怨』やわ」と納得がきました。私の感覚では、対話やゆるしが重要であるという確信はあるけど、「そりゃあ、みんなには伝わらなかったところあるな」と今は思います。そして、同じように1970年代の水俣でも和解やゆるしについて考えていた人はいたから、「それでいいんだ」と思いました。「これが歴史なんだ、運動史なんだ」ということを初めて、頭ではなく心から理解できました。

そして運動史を学んでいくと、水俣病を支えてきた人たちについて知り始めて、かれらは水俣病の患者という意味では、当事者ではないけれど、水俣に住み込んで……「もう、誰が当事者か、わからない」と思ったんですよ。40年以上、水俣に住み込んでいる人たちに、「あなたは支援者であって、当事者ではありません」なんて言い切れるものは私の中にはなかったし、水俣にきたきっかけがなんであれ、「水俣で生きていく」と決めることは当事者性なのかとか、いろいろ考え始めています。10年前の私は、当事者原理主義者でしたから、「支援者黙れ」とか「お前は当事者ではない」とか思ってたけど、「あっ違う、なんかもっと複雑やわ」と思い始めました。結論は出ていませんが。

話がそれたので、質問者の方の質問に戻りますが、当事者研究というものは、本人のセラピーとしてはいいと思うんです。自分を対象化すること自体が、当事者にとってすごく新鮮だと思うし、仲間とやっていくのも楽しいと思うし、自分をポジティブに捉えるようになることもすごくいいと思っています。でも、研究者として研究する話になると、やっぱり、「すごく辛いからやめたほうが……」とも思います。たとえば、当事者は裏事情を知っているで、嫌いな支援団体の運動史を書くのがしんどいというの也有ります。客観的には名声のある団体であっても、個人的には「書けないけど、知っている真実」があることはよくあるわけです。なので、「なんでこんな団体を褒めないといけないのか」とか。そういう葛藤も引き受けて、当事者として引き受けてやるというのは、私は止められません。そもそも止められるものではないし、意欲のある当事者の邪魔をするのも変ですしね。難しい線引きだと思います。

富岡薫（慶応義塾大学大学院博士課程）：私は倫理学を博士課程で研究していて、倫理学の分野で声を聴くということをもとに研究したいなと思っています。質問は、哲学や倫理学と

いう分野において、当事者の声を聴くという手法に正当性を与えていくうえで気をつけていることがあったら教えていただきたいなと思っています。たとえば、小松原先生が先ほどおっしゃって下さったように、いろいろな声を聴いてそこに一貫性を見いだして、そこに思想を抽出していくっていうのがひとつの方法のように思うんですけど、なかなかそれが難しいなと私が感じています。もうひとつとして、倫理学ってすごく規範性を重視するようなところがあると思うので、その規範性とバッティングするような声にならない声っていうものを倫理学とか哲学の分野で拾い上げるっていうときに、何か小松原先生が気をつけていらっしゃることがあれば教えていただきたいなと思います。

小松原：すごく難しい質問ですね。倫理学という分野の特性の問題があります。ストレートな倫理学というのは、「何が正しくて何が正しくないのか」とか「どうすれば正しいことが上手くやれるのか」をクリアに出すひとつの方向性があります。いわゆる規範倫理学ですね。この規範倫理学が主流になっている学会の中で、自分が当事者の声を扱うときに、ひとつ懸念があります。それは、ひとつの当事者の声を取りあげることで、それが規範になってしまい、他の当事者の声が劣位に置かれるということです。そういうのはすごく意識はしています。ただ、私の場合、「何が正しか」を論じるというよりは、「こういう声があるときに、私たちはどう考えたらいいでしょうか」というふうに、問いを開いていくような癖があるので、あまり規範に繋がるような発言はしませんね。あと、やっぱり当事者との相性もあるので、特定の当事者についてだけ焦点を当てているということもあります。そういうときは、他の支援者や研究者の人と話して、「おまえはこういう当事者を知っているのか」とか問われて考えるというのが大事だと思います。

稲田紘子（大阪大学4回生）：お話ありがとうございました。感想になるんですけど、別の方の応答で、今、怒っている人と赦しに向かっている人の話のところで、怒っている人に赦しについて話してもつうじないこと、逆もしかりだと思うんですけど、そういうのって、性暴力の被害者だったらそういうものとしてパッケージ化されてしまうと思うんです。でも、実際の当事者は、日々生活をしていくなかで段階的に移り変わっていくと思うんですね。それと社会運動とか、そういうものと結びつき方を間違えてはいけないかなと思いました。私は性暴力被害者の集まりに何度か参加したことがあるんですけど、ある会では当事者たちが怒りを爆発させていて、別の会では何十年も前に性暴力を受けた人がもっと出来事を対象化して、音楽を演奏したりしていました。後者はかなり対象化されているんだけど、時間の流れがあって、怒るということもあって、そういう状態につながってはいるんだろうなって思っています。

小松原：理想を言えばいろんなあり方があったらいいと思います。そう思うんですけど、

たぶんそういうのは、運動の内部に入った人が思うことで、外部から見るとやっぱり怒っている人が目立つから、怒っている人を応援することがいいことなんだってよく知らない人は思って、そういうところに人が集まって、お金がついたり行政とつながったりして、どんどんそこは大きくなっていくみたいなのところがあって、常にそういうことに対する葛藤はあります。研究者を志す前の、肩書きのない性暴力被害者だったころ、仲間と家の台所のちゃぶ台でお茶を飲みながら話していました。そのとき、「私たちが台所で話していることは、私たちの間ではめちゃくちゃ深まっていくけれど、どこにも伝わってないな」「台所で完結してるからな」みたいな話をしたのを思い出します。「誰にも知られていない、いい感じのこと」もあるんだというのを、伝えたいという気持ちが私にはあります。もちろん、「当事者の声を聴く」のも大事だとは思いますが、まだ「聴かれていない声」のために余白を準備しておく、というような話です。